

続・ボランティアと共生

手話を学んでいて比較的浅い時期に「ボランティア」という単語を習う。「苦労一あげる」という表現である。こちらの方が一般的であるが、通訳者の間でかなり広まって来ているもう一つの表現がある。「共に一歩む」という表現である。手話通訳論の中で通訳理念としての「共に歩む」論からの援用らしい。私自身もこちらの方を気に入って使い始めていたのであるが、最近、これは意識のしすぎによる異訳の類いのことではないかと考え始めている。

さて、もう一つ通訳活動をボランティアと区別する場面に出くわしたことがある。それは通訳に来た通訳者が「ボランティアですか？」きかれ、「いいえ、派遣です」と答える場面である。この区別は要するに、制度化された通訳制度の積極的な位置付けということであろうが、お金が出る一出ないという意味をももっている。けれど労働と割り切って仕事をしているのではない限り、そして福祉関係で仕事に見合った金がでないという現状では、その区別は明確ではない。

最初の話に戻そう。「ボランティア」とはその手話の表現が的確に示しているように、結局「～してあげる」という次元での活動ではないか？「～してあげる」という言葉のもつ差別性については、色々な人が指摘している。「高みに立ったところでのあげるというところで差別的考え方が示されている」等など。扱、では共生はどうか、「共に歩む」という手話表現の変形を考えたことがある。「聴障者の運動の主体は聴障者である」という含みを持たせて、聴障者の方の歩みを前に出して、健聴者を遅らせる表現である。又、私自身、自分が言語障害者ということで、その立場での「共に歩む」ということを、健聴者の立場での「共に歩む」とは違うというような思いを抱いたことがある。

けれども、最近何故、健聴者が何故通訳活動やサークルを続けられるのか、逆に何故、健聴者が何故長続きしないのかと考え始めて、そもそも通訳活動というのは健聴者の立場でなされているのだろうか？と思い始めた。自らの立場性が曖昧であるということにおいて、ボランティアなのだけれども、一人一人が健聴者の立場で活動しているわけではないのではないか？そのような次元にとどまっている人は結局離れるか、仕事として割り切って継続する人ではないだろうか？と考えた。

私自身が、聴障者の運動の中心は聴障者自身であるという命題で、聴障者を前に出し一歩さがるような感じで運動を進めて来て、聴障者の運動ということでは、それは当然のことなのだけれども、そのことを自らの立場性を押し殺すとか、自らの立場性を持ち込まないというような運動を展開していた。五分五分の関係として取り結べていなかったのである。それが、「共に歩む」ということになりえるかと言うと、違うと思う。

共に歩む一共に生きるとは、自らの立脚点を明らかにしつつ、自らの抱える問題を明らかにしつつ、その問題と聴障者の問題との結び付きをとらえかえしつつ、自らの運動のエネルギーを見つめつつ、そこに根拠をおきながら、活動していくことではないかと思う。自らの問題を提起しつつ、自らの問題と聴障者の問題の関係性を提示しつつ、そこへ聴障

者の参加も呼びかけしていく、それが共に歩むー共に生きるということではないだろうか？そのような運動として展開しえた時に、自らの全人格をかけたかかわりとして、永続的なかかわりとして、共に生きえるのではないだろうか？